

ネットが普及してから20年以上たつという。患者さんだって、訴えることも考ええることも変わるはずだ。

高齢者の多くは、新聞やテレビ、知り合いなどから情報を得ているのか。頭が痛ければ、脳腫瘍やくも膜下出血などという。皆がよく知っている病気を疑って受診する。一方、ネットをよく使うひとたちは、まずは、「ネットで調べた」で話しが始まる。疑う病気は、いろいろである。時には、どうして思いついたのかよく分からない病名だったりする。

先週のコラムに書いたM子さんの息子もそのひとりだ。認知症の母親が、時々、立ち上がる時に頭痛を訴える。ネットには、脳脊髄液減少症の頭痛は、起き上がりで始まるという。慢性になると、認知症みたくにもなるというのではないか。と、いろいろの類似点を見つけては「同じ病気だ」と思い込んでしまったようだ。

それは、ネットのせいなのか？病気を疑うには、発生機序や診断基準に関する情報が必要になる。それらの情報は、ネットで簡単に手に入る。が、量が多すぎて記憶できないう。もっとも、検索すればいつでも取

り出せるから、記憶する必要はない。でも、印象深いことや自分に都合の良い情報は簡単に記憶され、分かったような気になってくるものだ。それで、情報源をネットに頼るひとは、やすやすと勘違いしてしまうか？

昔は、テレビは電気紙芝居と呼ばれ、日本人は「一億総白痴化する」と騒がれた。今や、ネットに使いすぎでデジタル認知症になるというひともいる。だが、正しい知識なら多いほうが良いはずだ。テレビもネットも使い方次第。もっと情報源を増やし、要約する。せめて、キーワードだけでも書き出してみよう。調べ物には、時間をかけなければ。えっ。そんなに面倒なことではないか？

(石黒修三＝いし黒くろくにっく・脳神経

外科専門医・3/7北國新聞掲載)